



Title	TICOの挑戦
Author(s)	吉田, 修
Citation	目で見るWHO. 2022, 82, p. 14-15
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/89916
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

TICOの挑戦



自称兼業農家(外科医)

吉田 修

昭和33年生まれ、徳島県出身。平成元年4月、青年海外協力隊でアフリカのマラウィ共和国へ外科医として派遣されたのをきっかけに、アフリカを始め世界各国にて国際医療支援活動を実施。現在は古野川市山川町のさくら診療所で地域医療を実践しながら、有機農業にも取り組む。さらに、アフリカのザンビアを中心に医療・農村開発などの国際協力活動を行なっているNGO、TICO（ティコ）の代表として国内外で活躍する。

ザンビアでの活動開始

TICO (Tokushima International Cooperation) は1993年より活動しています。徳島のローカルなNGOで、1997年ごろから主にザンビアで活動しています。

首都ルサカの貧困地区（ンゴンベ）での栄養改善が最初のプロジェクトでした。その後、女性の職業訓練、保育所開設から、小学校に発展し、15年ほどでTICOはフェードアウトしましたが、その後もその活動は続いています。

同じ頃、警察と市民ボランティアの連携で救急隊を創設、神戸市救急隊の多大なるご協力をいただき、ルサカ市内の一般市民の救急要請に、訓練された救急隊が対応する体制ができました。これはアフリカではほとんどないことと考えられます（病院間の救急車搬送しかない）。活動資金調達のため、スポンサーを探したり、事故処理を有料で行ったりと、事業継続のための様々な努力を行いました



写真1 パイナップル畑 北西部州イケレンゲ、オーガニックでどんどんできる地域です。養蜂も盛んです。

が、この事業はTICO フェードアウト後には結局、警察側の予算付けもされず、数年前に最後の救急車の故障とともに終わってしまいました。

干ばつへの支援

2002年、南部アフリカを干ばつが襲いました。国連の発表で被災者は1200万人、ザンビアも南部を中心に200万人が飢えました。TICOは、食料配給のお手伝いやワクチンの実施、壊れたため池の修理など緊急救援を行いました。この干ばつをきっかけに、チサンバ郡で「干ばつに強い村づくり、WAHEプロジェクト」が始まりました。WAHEとは、Water, Agriculture, Health, Educationの頭文字です。水源の確保、干ばつに強い農業、住民参加の地域医療、教育を総合的にやっていこうという野心的なものでした。

Healthの分野では、JICAとの連携で第1期事業（Hearth Postの建築＋村々の保健ボランティアの養成）、第2期（お産を待つ家の建設＋安全なお産に関わるボランティア養成）、第3期（地域保健委員会の活動強化）を述べ10年間実施し、かなりの成果を上げることができました。

この間に学校改築・新築3校、奨学金制度開設、井戸掘り、種子バンク、環境保全型農業の導入、牛の薬浴槽の設置、小規模ローンの実施など地域住民（特に女性）と対話を重ねながら様々な事業を行いました。特にソーラー発電＋井戸＋点滴灌漑による通年農業（乾季にも作付ができる）には大きなポテンシャルを感じ

ました。（残念ながらカルシウムによる灌漑パイプ設備の閉塞が予想以上に深刻でうまくいきませんでした）

TICOの転機

JICAの事業終了に伴いTICOはチサンバ郡より撤退しました。事業の対象とした地域住民には常に「自立」「持続可能性」を求めているにもかかわらず、TICOの運営は助成金に頼っている、この自己矛盾・NGOの限界を私自身が強く感じるようになりました。事業を持続可能なものにするための経済活動を伴わなければ、綺麗ごとで終わってしまうという危機感がありました。

心臓外科チーム養成事業

3年前にたまたま縁があって、UTH（ザンビア大学教育病院）と心臓外科チーム養成事業を始めることになりました。ミレニアム開発目標（Millennium Development Goals: MDGs）により、ザンビアでは乳幼児死亡率は劇的に改善しました。しかし、先天性心疾患、溶連菌感染後のリウマチ性心臓弁膜症に対し、必要な手術が行われていません。（私の推計では年間6000件ほどの小児の心臓手術が必要です。）それに加え生活習慣の変化、長寿化により虚血性心疾患、大動脈瘤などが激増しています。

まず大学側が専属チームを選定、訓練に集中参加できる体制を作りました。4人の医師と看護師（人工心肺装置を扱う）の講義とウェットラボ（豚の心臓による訓練）が始まりました。1ヶ月間の日本での研修も実施しました。最初の手術は、



写真2 僧帽弁置換術後の患者さんとチーム National Heart Hospital (NHH) ICU



写真3 開心術 (NHH 手術室)

2歳の女兒3人、動脈管開存症という先天性の疾患でした。すでに心肥大が著しく放置すると死が迫っていることは明らかでした。幸いこの疾患は心臓を止めなくても根治手術が可能です。ザンビア人医師の執刀で3例とも成功し、元気になっています。次の症例は、いよいよ人工心肺装置を使った開心術でした。最もシンプルな心房中隔欠損症を選びました。ザンビア人が執刀した初めての心臓を止める手術です。時間はかかりましたが手術は成功しました。その後数例手術を実施、軌道に乗りかけたところでコロナ禍により中断していました。

この間にザンビアでは心臓専門病院が開設（まだ心臓手術は実施していない）され、国家を上げて心臓病に立ち向かう体制となり、ますます心臓外科チームの充実が重大な関心事となりました。やっと日本の出入国規制が緩和され、2022年5月に新病院で事業を再開、超重症弁膜症4例に挑戦しました。術中に停電するなどトラブルも多々ありました。長年の弁膜症の進行に悩み手術を待ち続けた症例でした。残念ながら2人の患者さんは術後亡くなりました。次のミッションは2022年8月下旬から行う予定です。症例の選定からしっかりと準備し万全の体制で臨みます。

TICOのこれから

アフリカの大規模で深刻な干ばつを何度かみてきました。ザンビアでは、主に家庭燃料（炭やま薪）のためにどんどん森林が伐採されています。世界中で熱波、山火事、大洪水が起こり、もはや地球温暖化は現実の脅威です。グレタ・トゥーンベリさんを筆頭に世界の若者が「我々の未来が奪われている」と怒りを露わにし、大規模なデモを行っています。そんな中、著名な天才宇宙物理学者ホーキング博士が「人類はあと100年で滅亡」との予言を残して亡くなりました。これは衝撃でした。

私ごとですが、孫が既に5人います。「ジジーの時代に地球が壊れた、未来

を奪われた」と孫たちに言われたいように残りの人生をしようと考えています。

「ドローダウン 地球温暖化を逆転させる100の方法」という本が出版されました。それによると農業・森林保護の分野の比重が非常に大きいこと、女性の権利や教育が温暖化防止に貢献することが書かれています。これはまさにTICOが農村で実施してきた「WAHE プロジェクト」です。WAHEはわかりにくいので名前を変えて「Global Cooling Farm」として既に始めています。真の持続可能性のためには事業化し儲かる農業でなければなりません。これまでのNGOにない発想で挑戦していきます。



写真4 TICOが養成した保健ボランティア (Community Health Worker)による毎月の小児検診